



六花

8

2022

りっかはいくかい

# 野中の清水 ◎ 山田六甲



曳汐は橋脚を掘り原爆忌  
ひたひたと夏潮を踏み巖島

新潟県村上

へぼ胡瓜笹川流れの塩甘し

裾分けのお裾分けなるへぼ胡瓜  
棕櫚の葉に振り落とされず蝸牛

西行「野中の清水」

夜は星を繰り出してくる清水かな

安倍晋三元首相銃撃 七月九日

ぐらぐらと蝉の山湧く神出かな

東風の死七月十日霊園

日光山青田の風に包まれし

青柚子や棘に刺されてでも挽ぎぬ  
印南野の梅雨明けきれぬ余り苗  
稲美野の転がしてある西瓜かな  
抱きあげて丹田温む西瓜かな

滝道に水は一旦狭まりぬ

三尺寝覚めて眼鏡をさぐりをり

人間国宝陶工市田氏にもらった

うづくまる茶碗にお薄点てにけり

善野行

校正の冷やし珈琲ゼリーかな

## みづばせう尾瀬も箕面も同じ空 出口 誠

「尾瀬も箕面も同じ空」という気づきに考えさせられた。人の心は空のように流転する。誠君の住む箕面は今まで鬱とした空であったが、水芭蕉の開く尾瀬のすがすがしい空を見て、箕面も本当は美しく澄んでいるはずだと振り返る。空は見ている人間の心の投影かもしれないぬ……。箕面の滝は後藤夜半の「滝の上に水現れて落ちにけり」という名句が生まれている。滝の句は句会では誰の選にも入らなかったという。のちに虚子が褒めたたえたから、一躍有名になった。こういう一見地味な名句の生まれ方もある。(六甲)

みづばせうおぜもみのおもおなじそらで ぐちまこと

雪嶺抄

## 薔薇の母子 ◎ 笹村 政子

ぼうたんの影一片のくづれけり

ありあまる光に倦めり白牡丹

牡丹散り空に眩しき鴟尾のこる

しやちほこの鈍く光れる暮春かな

先導と頼みし蝶やお砂踏

白鷺の石橋くぐる一步かな

木の芽雨群を離りて鳩来る

あめんぼの雨の水輪に跳びにけり

せはしなき虻の上なる藤の花

しやがみぬる薔薇の母子を眩しめり

しやがみぬる薔薇の母子を眩しめり

しやがみぬるばらのおやこをまぶしめり  
▽しやがみぬるの句、薔薇の咲く園か庭で母と子が  
しやがみ込んで何か会話している光景を目の当たり  
にしてうらやましい、懐かしいと感じたのか。今は  
そいつ母

と子の仕草も出来ないことを自覚、その光景を今は  
再現できないからこそ特にまぶしく感じたのだろ  
う。刻は残酷で巻き戻せない。「ぼうたんの影」も  
さすが「影詠み政子」の真骨頂。「お砂踏」の先導  
を蝶がしているというの也使い古された表現だが佳  
い。善通寺か。あめんぼの句には何かユーモアと人  
生が潜んでいるようで興味深い。

古茶 ◎ 志方 章子

母の日の母の恋しき八十路かな  
和菓子には古茶が宜しき客用意  
囀りをBGMと聴きをりぬ

紫も白もピンクもみんな薔薇

緋目高の透明なるを羨める

柏餅親兄弟のもう在らず

はんなりと遺影に挿せる牡丹かな

ふらここを大きく漕いで母に会ふ

搔き込める到来ものの花菜漬

旅列車一瞬過ぐる麦の秋

和菓子には古茶が宜しき客用意

わがしにはこちやがよろしききやくようい  
▽来客の準備をしながら、和菓子を出す、やはり和菓子には古茶がいいという。古茶とはその年以前に摘んだ茶で、夏の季語。新茶の味とはまた違ったところのある風味が喜ばれるらしい。茶道でいう古茶は「風炉の名残」の茶会に使われるもので別の季節。章子は床しいことを母から学んだものかよく知っている▽ふらこの句、ふらここは昔の呼び方で鞆（しゅうせん）ともぶらんことも。由来は以前に書いた。

▽はんなりとは、上品で落ち着きがあり、明るさ、華やかさ、陽気さも併せ持つさまを表す言葉。代表的な京言葉の一つとして知られる。と辞書に。

はまなす抄

五月の百舌鳥 ◎ 升田ヤス子

藤花の影の影色水の上

山茱萸の花芽かそけき黄となんぬ

御忌の寺花の手水に迎へられ

浮き沈みするかに雨のつばくらめ

通し鴨濠の木暮が好きさうで

万緑や笥は水を銀色に

茉莉花や衰へてゆく香の華麗

羽衣ジャズミン尾上の鐘を見し夜の

どの鳥を真似ある五月空の百舌鳥

黒南風や脚ふるはせて小鷺立ち

どの鳥を真似ある五月空の百舌鳥

どのとりをまねいるさつきぎざらのもず  
▽五月の空にモズがほかの鳥の鳴き声を真似て鳴いている。「百舌鳥」は秋の季題。木のてっぺんなどでキーイッ、キーイッと鋭い声で鳴くから秋に渡ってくる鳥かと思いきや、留鳥だと二三年前に知った。いろいろな鳥の鳴き声をまねるから百舌鳥という語が当てられたというもの。ヤス子のいうのは何鳥の声なのだろうか。▽万緑の中の句、笥を流れる水が緑色なのかと思えば、銀色だと見た。これが文芸。五月空（さつきぎざら）は梅雨空のどんよりとした空のこと。

水かげろふ ◎ 善野 行

四阿に水のかげろふ端午かな

桜蔭降るは零れし言葉なり  
雨粒にひこひこ応へ若蓬  
降る雨の速き流れに藤の花  
乳足らひし嬰兒のにほひや柏餅  
柏餅葉のしよつぱさに子は育つ  
四阿に水のかげろふ端午かな  
アカシアの散り余したるにほひかな  
麦秋の中印南野の道真直  
溝掃除して持て帰る杜若  
橋詰に来ては見かへす桐の花

あずまやにみずのかげろふたんごかな  
「かげろふ」というのは「光がほのめく。光がちらちらする。」(出典・山家集下)という現象。句は四阿(あずまや)に座していると、天井に、ほとりの水の反射(照り返し)があつてかげろふっている。まるでタンゴを踊っているようだ。という音の幹旋も。揺れているのは作者の心のかげろふ様(さま)に通うのか。端午は五月五日。また光でなくカゲロウ(蜻蛉)は昆虫の中で最初に翅を獲得したグループの一つであると考えられているという。幼虫はすべて水生。不完全変態で交尾はせず、食べる口を持たず子孫だけ残すために生まれてくる哀しい運命を背負った儂い虫。道綱の母は夫が恋人に当てた手紙を見つけて「かげろふ日記」を書き始めた理由も分からなくもない。ちなみに「水かげろふ捉へむとして夫に触る 大石悦子」という蜻蛉日記を踏まえた名句がある。  
アカシアの句、「散り余したる」に文芸の心を刺激され、散り余した「にほひ」に俳句の機微がある。夢風撰候補。行の作品は古典を踏まえた俳句への挑みがあり、これから先どう変化していくのか楽しみ。

野遊抄

牡丹 ◎ 住田千代子

老木の洞の湿りや花明かり  
光りたる流れの底の春落葉  
花屑の朽ちて静けきお濠かな  
先端を水に預けし青柳  
城垣を日が見てゐて花疲れ  
花藤の神木の紙垂揺れみたり  
祠への天蓋として藤の房  
(尾上の鐘)  
春闇に天女は領巾をなびかせて  
寄り添うて翳の重たく白牡丹  
牡丹の雨の匂ひに崩れけり

(尾上の鐘)  
春闇に天女は領巾をなびかせて

はるやみにてんによはひれをなびかせて  
▽この天女は尾上神社の宝物蔵に収蔵してある朝鮮鐘。今年春のある日、升田ヤス子の案内で神社の人に見せてもらった。その折、天女を彫刻した鐘の青銅の美しさに見ほれた。「なびかせて」ははたしてそのよつであるが、あくまでも素人表現。時間があればもう少し抑えた工夫が出来る。よく推敲すれば見つかるかも。尾上だけで句は出来ると思うがどうだろう。罅割れた朝鮮鐘が播州地方に多いのは何か理由があるに違いない。そのことも含め踏み込んでみると、もつと印象深い句が詠める人。夢風撰候補。

## 一鉢に闇 ◎ 平居 滯子

白牡丹一鉢に闇下りてくる  
 何故の流刑や牡丹濠に浮く  
 告白と沈黙の間に剪る牡丹  
 式台に音なく崩る牡丹かな  
 牡丹に追はれ回廊登りけり  
 真黒な美術館建つ街薄暑  
 片陰を来て再会のモデイリアニ  
 通過する列車何本四月尽  
 鯉幟古墳の緑抜き泳ぐ  
 父として五人の遺児と子どもの日

## 鯉幟古墳の緑抜き泳ぐ

こいのぼりこふんのみどりぬきおよぐ  
 ▽鯉幟の句「抜き泳ぐ」が佳い。泳ぎの形の「抜き手」ともとれるが古墳群の緑の上に抜きん出て泳ぐ鮮やかな鯉幟であろう。「白牡丹一鉢に闇下りてくる」の句は夕暮れから夜になり闇に包まれると白さが際立ってくるのを詠んだ。夢風撰候補。一鉢と言ったのは他の牡丹よりも際立って白さが浮かび上がるのである。▽もう一つ、告白と沈黙の間に剪る牡丹というのが物語的で鑑賞の幅が広がる。夢風撰候補。

## 初蛙 ◎ 広畑 育子

春風や昼炊くごはんほつこりと  
 草むらのあの辺りなる初蛙  
 仏生会なんぢやもんぢやの花そよぐ  
 流鶯のこぼしをりたる花木五倍子  
 湯搔きたる筍友の友より来  
 花槐てらてら光る物干し場  
 大樹なるニセアカシアの香の遠き  
 ルピナスや創立古りし校門に  
 座敷窓太藷の垣のたをやかに  
 五月かな道後の旅を見送れり

## 草むらのあの辺りなる初蛙

くさむらのあのあたりなるはつかわわず  
 ▽初蛙の句、初蛙らしい句。和歌の仕来りのように、姿より鳴き声に春の訪れを聞いたのだ。芭蕉も「古池に飛び込んだ」蛙の音を聞きとめて春を感じている。もとより「古池とは冬の終わりの池」のこと、という字者もいる。古草と同じで若草にまじって枯れ残っている去年の草に通じるのか。

▽流鶯は木から木へと飛び移って鳴く鶯、一説に、なめらかにさえずる鶯。(季・春)

▽花木五倍子は、はなきぶし。「五月かな道後の旅を見送れり」は参加できなかった心残りを詠んだ上手い挨拶句。

## 愛の鍵 ◎ 永田万年青

蓮華草密に寄り添ひ可憐なり  
 若葉風初めての道新鮮に  
 紅牡丹路地の入口華やがす  
 柏餅破れ葉つぱの苦かりき  
 恋人の岬に棕櫚の花並木  
 棕櫚の花天辺以外は刈られけり  
 青葉光生まれ変はりし岬かな  
 初夏や岬の柵の新たなり  
 初夏や数個になりぬ愛の鍵  
 夕暮れの空半円に焼かれたり

初夏や数個になりぬ愛の鍵

はつなつやすうこになりぬあいのかぎ  
 「愛の鍵」とは二人が離れぬようにと鍵をかけて  
 おく記念の錠。だが戯れの愛は儚く日々錆びて行く。  
 当初、恐ろしい数の愛の錠が吊るされていたとい  
 が、今では数個しか残っていないという嘆き。形あ  
 る愛なんて、二人が離れないように、鍵を海へ捨て  
 たというが、愛のかげらなんぞ魚も食わない。恋人  
 岬が整備され手を入れられて生まれ変わったように  
 なった。この句の場合、数個という表現にもう少し  
 工夫があると哀れさも出て生きてくる。だがその哀  
 れに眼を向けた万年青を褒めよう。

## みづばせう ◎ 出口 誠

初夏の朝アラム音のけたたまし  
 みづばせう空に向かつて咲きにけり  
 主なき家の庭にもみづばせう  
 みづばせう白いコップと黄ストロー  
 みづばせう尾瀬も箕面も同じ空  
 あげは蝶二人そろひて蜜を吸ふ  
 紅白の星となりたるつつじかな  
 いらいらで書けぬ俳句よ初夏の宵  
 初夏の宵洗濯物をたたみけり  
 初夏の宵息子の料理食べてをり

みづばせう空に向かつて咲きにけり

みづばししょうそらにむかつてさきにけり  
 ▽この句が夢風撰の句を呼び込むきっかけになった  
 と思う。彼は長い間不調で評価されなくても「「花」  
 でひそかに粘った。夢風撰の句は粘って負けずに句  
 を紡いだからこそ生まれた句である。名句は簡単に  
 覚えやすい。後藤夜半の滝の句も、最初句会では誰  
 の選にも入らなかったが、のち虚子に認められて有  
 名な句になった。この  
 も何の変哲もない言葉で綴られている。名句とい  
 うのはそういうもの。

## 小町針 ◎ 江見 巖

鯉幟ふくらむ風にまかす腹  
 憲法記念日若者離る人の数  
 母の日や錆びるまである小町針  
 初鯉夫の出刃もつ妻の皿  
 天秤棒店から出れぬ金魚かな  
 地縁血縁なくなりぬ田植かな  
 箱眼鏡噛み跡ほそくなりゆけり  
 タンカーの波のとどくや夜釣舟  
 初めての水の流るる溝浚へ  
 ハワイより帰つて来るや仏桑花

母の日や錆びるまである小町針

▽母の日に母が使っていた小町針が錆びたまま残されていて針山にあったのを詠んだ。錆びても捨て切れない母の愛用した針。母への思いが通った作品。小町針とは、裁縫で、布を仮にとめておいたり、縫いどめのしるしとしたりするために用いる、糸を通す穴のない針。夢風撰候補。どうして小町の名がついたかは百科事典で調べてほしい。ここでは書きにくい。

## 花手鞠 ◎ 谷日 一献

あめんぼうばかり忙しき濁り池  
 憂きことの多かりし日々白牡丹  
 牡丹を暫し眺めて吐息かな  
 木苺を剪りたる鋏響きけり  
 懐かしき中国訛り半ズボン  
 浜坂の思ひ出摘みし浜屋顔  
 掌にそつと受けてもみたき花手鞠  
 万緑の間を舐めて往く鳶とんび  
 ひんやりとした枕好き半夏生  
 黄昏たそがるるハーバーランド麦酒乾す

掌にそつと受けてもみたき花手鞠

てにそつとつけてもみたきはなでまりのひらに受けてみたいものだ、という果たせぬ願望がちらりと覗く。「何を?」「いやあのお方を」と秘密の会話がなされるところであるが彼はもともと上品で紳士であるからできない。が考えていることは大胆でそんなことをしたら大事だと知っている。もし弾けたら振られたら大きな深傷を負う。「黄昏るる」の句。昔ハーバーランドへ渡る鉄橋の上でハインケンの瓶麦酒を写真仲間でラッパ飲みしたこと思い出した。ラッパ飲みはよく酔うのである。エッセイも好調である。お酒の知識はプロ。来年には句集出版も考えているようだ。

青鷺 ◎ 田尻りさ

冷蔵庫に小人棲むらし音のして  
母の日の不良気分で煙草かな  
草引くやどくだみの香の夜更けまで  
滝下に大岩坐せる五ヶ瀬川  
春のバスの掛りて子の寄り来  
足も気もほとほと弱り梅雨籠り  
彼の人も八十路越えしや鳥雲に  
老鷺の眠たげに鳴く谷渡り  
故郷言葉芯までわかり春立ちぬ  
青鷺の降り立ち瀬音静まりぬ

青鷺の降り立ち瀬音静まりぬ

あおさぎのおりたちせおとしずまりぬ  
青鷺の貴祿を詠んだ。青鷺が飛んできて瀬に立つと凜とした空気に瀬音が止んだような気がしたのだ。鷺は年中見かけるので、青鷺だけが夏の季と思っていたが、白鷺も夏の季語。ほとんどの鷺が夏の季語である。句評を書くことは勉強になる。母の日の句は「不良気分」が愉快。五ヶ瀬川は昔六花に五ヶ瀬川流一さんが居た。十年ほど前宮崎に行ったとき五ヶ瀬川沿いに上流へ行ったことがある。天岩戸にも行った。懐かしい地名。

春の雨 ◎ 草場つくし

ワイパーで何度も消され春の雨  
バスの客私一人の長閑な日  
寄合のまだ温かや柏餅  
夏めきて空地の草に猫隠れ  
ぼうたんや誉めて朝の挨拶に  
新茶のむ耳に舅の武勇伝  
新茶の香姉妹揃ひて形見分け  
新緑やスタッカートの鳥の声  
新緑の九重下ればさとのこゑ  
検査後の待合室の夕薄暑

ワイパーで何度も消され春の雨

わいぱーでなんどもけされはるのあめ  
春の雨を生き物のように詠んだ。春の雨と春雨の違いは以前書いた。車のワイパーで消されても消されてもガラスに張り付く雨が見えて来る作品。夢風撰候補。

草場さんは本部句会でも重要な世話役をしてくれている。長崎出身で、結構豪快な作品をぶつけてくる。新緑の句は阿蘇の九重連山を詠んだ。私も一人バイクで阿蘇「やまなみハイウェイ」を走ったことがある。気持ちよかったがガソリンが切れないか心配しながらのバイク旅行。

## 大渦の顔 ◎ 浜田久美子

かつて母見舞ふあはじ路山若葉  
大渦の顔の見ゆるや夏浅し  
麦秋の讃岐路まづはうどんかな  
山間の郷のうどん屋鱈寿司  
空豆もお座敷飾る品になり  
秘そと咲き秘そと枯れゐる竹の花  
愛でもなく竹の花咲く饅頭店  
竹の花初めて目にす讃岐路に  
百年も耐へて咲きしや竹の花  
旅人に見過ごされゆく竹の花

大渦の顔の見ゆるや夏浅し

おおわずのかおのみゆるやなつあさし  
鳴門海峡大橋を渡るとき眼下に鳴門海峡の渦潮が見える。その形容を「渦の顔」と見たてたのはさすが。今まで観潮の句は多いが渦が顔に見えた人はあるまい。大渦の顔が「ローマの休日」の名場面「真実の口」にも見えたのだから。渦は様々な顔を見せる。その表情は喜怒哀楽も見せてくれるのではないかと読者も想像する。こういう新しい視点を見つけたり気づくのも大切。新しいことばかりが佳いことではないが新しい新鮮な切り口も文芸には必要なこと。なにもない変わらなさと揶揄された「ホトトギス」にも若い俳人がどんどん伸びてきている。夢風撰候補。

神吉抄

## 春耕の畝 ◎ 磯野青之里

春耕の畝に小さき靴の跡  
草上に残す轍や苜蓿  
母子草包む面影綿毛かな  
その色の散りて鮮やかチューリップ  
大根の花に薄色寂しかも  
花のまゝこぼるる勿れ雪柳  
義仲寺に咲く山吹の揺らる朝  
風颯る体くねらせ鯉のぼり  
新緑の森美しや木々育つ  
支綱切つて進水初夏の風

春耕の畝に小さき靴の跡

しゅんこうのうねにちいさきくつのあと  
「耕す」は春の季語。その春耕の畝には小さな靴の跡がついている。動物の足跡が子供の歩いた跡であろう。それは人間の幼児の足跡とみても鑑賞できる。祖父が父親が耕した畝に子供が歩いたとみて鑑賞すれば、よちよち歩きの跡であろう。親が祖父の農作業の後を付いて歩いていると思うのも嬉しい光景。この足跡によって植え付けが出来なくとも、叱るより歩けるようになった幼児の成長が嬉しいのである。チューリップの句も、よくある光景のようであるが、朽ち色に散ったのでなく散つて鮮やかという気づきがこの句にはある。颯るは「なぐる」と読む。近年は両側が女で中が男に変わってきているが。